

〔徒然草〕下花はさかりに、月はくまなきをのみ見る物かは、雨にむかひて月をこひたれこめて春の行へしらぬも、猶あはれに情ふかし、略望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、曉ちかくなりて、待出たるがいと心ふかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢にみえたる、木の間の影、うちまぐれたる村雲がくれの程、またなく哀なり、椎柴しらがしなどの、ぬれたるやうなる葉のうへに、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ、すべて月花をば、さのみ目にて見る物かは、春は家を立さらでも、月の夜は聞のうちながらも、思へるこそいとたのもしうをかしけれ、略下

〔筆のすさび〕四一月を見る説、友人橋本吉兵衛、名は祥來り、語る、人の月見るに、人によりて大小あり、おのれは徑二三寸のまろき物と見しが、人によりて徑六七尺にも見ゆるあり、六寸許に見ゆるは、尋常の人の目なり、されば所謂ぬか星などは、おのれが目には見えざるべしといふ、人々皆試みし事にや、予茶山管ははじめてき、ぬ、

〔雲錦隨筆〕四小兒に月を指しむることな、かれ、兩耳の後に瘡を生ず、月食瘡と號と也、

〔萬寶鄙事記〕占六天氣月 月の出入の時、よく見て風雨を知るべし、月にかさあるは風かならずかさのかけたる方より來る、前月大なれば二日に月みゆ、前月小なれば三日に月見ゆ、大二小三といふ、二日三日まで月見えざれば、その月風雨まげし、新月下にそりてかけたる弓のごとくに上にたまりなきは、其月雨すくなく風多し、あをのきて上にたまりあるは、其月雨多し、新月の下に黒雲横るは明日雨、月はじめて生じ、かたち小にしては、大なるは、水のわざはひあり、かたち大にしては、小なるは、三日のうち雨ふる、白氣月をつらぬくは、夏は大水、秋は風吹、黒氣月をつらぬくは、夏は大水出、春秋も水又は陰、月のそばに黒雲おこるは大水、月の上下黄雲くらく覆は大風、日の色しろく、夜る月の色あかきは早せんとする兆しなり、日の色あか